

<平成26年(2014)11月>

■ 「新編相模国風土記稿 寺田縄村」の項を読む <その2>

こうきつば  
高札場<sup>1</sup>

こな<sup>2</sup> 東町 西町 中町 北町

金目川<sup>3</sup> ひつじさる むらさかい につみ  
坤方、村界に少く係れり<川原とも幅二十五間余>堤を設く<高一丈二尺>

鈴川<sup>4</sup> 東方、村界を流る<幅八間余>板橋<sup>か</sup>を架す<長十一間>堤あり

用水掘二<sup>5</sup> 共に西隣飯島村にて金目川<sup>せきいり</sup>を堰入、村内の田間に引けり。此<sup>このあまり</sup>余入野  
村本堰<sup>ほんせき</sup>の分水<sup>ぶんすい</sup>をも引<sup>ひき</sup>沃<sup>そぐ</sup>ぐ

(注)

- 1 高札場：幕府や領主が決めた法令等を板製の札に墨書<sup>ぼくしょ</sup>して掲げた場所です。一般的には、村の出入り口や中心部などの人通りが多く、目立つところに設けられました。寺田縄村のどこに建てられていたかは不明です。  
宿場には、高さ約3m、幅約5mもある大きな規模の高札場<sup>こうきつば</sup>も設けられていたようです。自治会の掲示板は、さしづめ、現代版の高札(場)でしょうか。
- 2 小名：村の中は、「日枝神社のそばの北町、鈴川に沿った東町、古川に沿って西に延びる西町の町内がある。また、西町の一部に中条<sup>なかじょう</sup>という所があり」(平塚市民俗調査報告書4)、報告書の中条が中町とされます。
- 3 金目川は、<sup>ひつじさる</sup>坤(南西)の方角に流れています。一部が村にかかっています。堤防の間は約45mを越え、高さは3mを越えています。3mの高さは、標準的な家、一階の天井より高くなります。金目川の氾濫を防ぐ手立ての堤防でした。  
記録によると金目川は平均して十年に一度の割合で洪水を起こしていました。
- 4 鈴川は、金田村と豊田本郷村、平等寺村との境を流れ、川幅は約14.4mで、20m程の板の橋が架けられています。堤防も築かれています。  
金目川は、水田耕作になくてはならない「母なる川」また、「あばれ川」といわれました。

鈴川は、金田地区で使われた農業用水が流れ込みます。重要な両河川に、江戸時代には堤防が築かれていました。

- 5 用水掘二：飯島村で金目川から農業用水を二筋引き込み、一方は寺田縄村の田畑に利用しました。入野村の本堰ほんせきから取水され、入野村の水田で使われた用水を利用していました。

山王社<sup>さんのうしや</sup><sub>1</sub> 村の鎮守ちんじゆなり、拝殿はいでんあり<sub>2</sub>、神体木像（長五寸）<sub>3</sub>、天正十九年十一月、社領二石の御朱印ごしゆいんを賜たまふ<sub>4</sub>、四月中の申日さるのひ祭る<sub>5</sub>。  
 鐘楼<sup>しょうろう</sup><sub>6</sub> 延宝二年の鐘を掛  
 末社<sup>しんめい</sup><sub>7</sub> 神明 疱瘡神  
 別当東善寺<sup>べっとうとうぜんじ</sup><sub>8</sub> 山王山と号す、曹洞宗そうどうしゆう＜吉祥院末きちじやういん＞ 本尊薬師ほんぞんやくし ＜行基作、長二尺四寸＞ 開山蜜州長ちやうげん 巖そつ＜本寺三世、寛永三年八月廿日卒＞



日枝神社 社殿（覆殿）  
 社殿内に、本殿、拝殿が設けられています。

現在の日枝神社 参道・鳥居・社殿

(注)

- 1 現在は「日枝神社」と命名されています。伝えによると、神社の創建は永正十年(1513)といわれています。近江国、日枝神社から「山王権現」を勧請し、「山王権現社」、「山王社」と呼ばれていました。  
名称の変更は、明治になり、新政府が神仏分離の諸政策を実施し、「山王社」は「日枝神社」と改名されました。
- 2 社殿内には、本殿の建屋と参拝する拝殿が一つの建屋(社殿)に覆われています。この建屋を「覆殿」と呼びます。本殿と拝殿は「覆殿」の中に安置されています。
- 3 ご神体は高さ約15cmほどの木造で、本殿内に安置されています。
- 4 天正十九年(1591)十一月に徳川家康から神社の所領として2石の御朱印を賜りました。



左は「相中留恩記略」に記された山王社の説明と朱印状の写しです。

文面には「山王社は寺田縄村の総鎮守なり。社伝を失いて往昔の事詳ならず。されど旧社たるをもって、天正年中、御朱印を附せらる。御文言の写し、左のごとし」とあります。

続いて、御朱印状の文面が記され、『寄進 三王宮』(山王社)相模国小中郡 寺田縄郷之内 二石』と記されています。途中略し、年は『天正十九年十一月 日 御朱印』、「別当東善寺は曹洞宗にて社寺の傍らにあり」で終わっています。

- 5 神社の祭典は、四月の申にあたる日に行われていました。山王社の眷属は猿、山王権現の使いとされる比叡山に住む申(猿)になぞらえていたと思われます。本殿の正面には猿の彫刻が掘られています。(現存し、見ることができます)

本殿内の棟札によると、本殿が建てられたのは元禄五年、1692年とあります。今から三百年以上も前のことでした。元禄五年は、「平塚市内に遺存する建立年代の明らかな神社本殿では最も古い」(文化財調査報告書 第27集)と記されています。

6 境内には延宝二年（1674）に造られた梵鐘を掛けた、鐘楼があり、江戸期には鐘つき堂と鐘がありました。現在、境内の左側に、礎石だけが残されています。

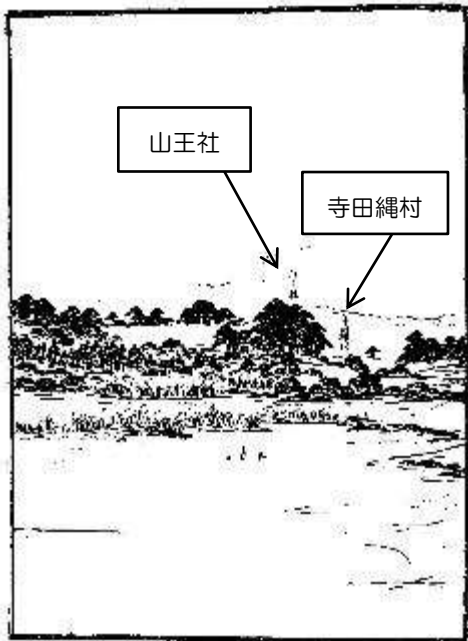
梵鐘は、第二次世界大戦のさなか、供出され返還されていません。

7 社殿に向かって左側には、神明社（天照大神）、右側には疱瘡の神を祀った末社があります。

8 山王社には神主さんが居ないので、隣の山王山 東善寺の住職が別当として、山王社の祭事・儀礼・社務等を担当しました。東善寺の宗派は曹洞宗で吉祥院の末寺となっていました。

東善寺のご本尊は高さ二尺四寸の行基作の薬師を祀っています。

東善寺の開山は、三代目、蜜州長巖禅師で寛永三（1626）年八月廿日に逝去されました。



左記は、真田村から寺田縄村、山王社方面を遠望した「相中留恩記略」の絵図です。→は書かれている文言です。

山王社とされる所に、ひと際高い木立があります。「寺田縄の大松」と呼ばれていた松の木でしょうか。

（\*）「相中留恩記略」：全二十六冊の内、二十五冊は天保十年（1839）に完成し、残りの一冊は安政年間に完成した。相模国鎌倉郡渡内村の名主福原高峯が、江戸の画家長谷川雪堤の協力で、徳川家康に関する相模国内の遺跡と名勝を探訪し、挿絵と文言を添えて編集しました。

<以上図版の出典『相中留恩記略 全』相中留恩記略刊行会編 有隣堂発行 1967年刊より>